317
31

北見志保子著

【草の實叢書第三編】

歌集 月光

東京
交蘭社發行

始

特219
741

北見志保子著

【草の實叢書第三編】

歌集 月光

東京 交蘭社發行

月

光

目次

早春譜（大正六年——九年）

早春……三
遠田の蛙……六
歸心……八
夕月夜……一〇
曇り日の河原……一二
雪と七面鳥……一五
兄と弟……一七
旅にいでて……二一
母の歌……二四

新月……二七
秋風……二九
葛飾……三一
秋の夕べ……三九
いで湯……四二

山川の曲（大正十年——十一年）

葬祭……四七
寂しさ……五〇
犬吠岬……五三
唐津……五六
虹の松原……五八
伯父逝く……六〇

天城山……六四
湯ヶ島……六九
赤倉……七二
赤城山に登る……七六
南の海……八四
生くる命……八八
月夜……九三

ひとり居（大正十二年——大正十三年）

高野山……九七
嶽辨天に登る……一〇七
病む日……一〇九
さかりすみて……一一三

ひとり居……一一五

那羅（大正十三年――大正十四年）

家居……一二一
友の寺を訪ふ……一二五
或時に……一三一
大極殿の跡にて……一三三
三笠山に登る……一三六
唐招提寺……一三八
法隆寺……一四二
當麻寺へ……一四四
二月堂夜詣り……一四六
淨瑠璃寺……一四九

多武峰……一五五
岡寺より橘寺へ……一五七
新薬師寺……一六二
馬酔木……一六五
法華寺に行く……一六七

草の實集（「草の實」創刊より大正十五年一月）

日向和田……一七三
五番町……一七六
梅雨空……一七八
夏……一八〇
或日……一八三
目黒にて……一八五

土佐の海……一八七
島の町……一九一
秋の路……一九五
小庭……一九七
朝顔……二〇一
晩秋……二〇三
箱根游行……二〇五
大湧谷に行くとて……二一〇
巻末に
口絵・月光菩薩像

早春譜

早春

道のべの枯れ芝中の細つばなほのかに赤く芽ぶき初めたり

ふるさとの我家のせどの細つばなことしもは
やく萠えにけむかも

うららかに春日きらへばあげひばり青麥畑に
けふも來鳴けり

きぞの夜ふりける雨に裏畑の苺の新芽いやの
びにけり

ねぎごとを心にもちてゆく道に雲雀あがれり
こゑもうららに

遠田の蛙

野田つづく馬込の村の夕あかり蛙の聲はすみてきこゆる

こもりゐの心わびしも裏にでて毒だみの花ふみにじりたり

歸心

幾とせを山の峽間に吾をまてる母に會はむと
ひとりかへるも

木立ふかみ水の音する山のべに母にあはむと
一人ゆく我は
鬼あざみほのかにさける切りそぎの山のはり
道ゆけばしたしも

夕月夜

夕月夜はぎのうれ葉におく露の風ふけば散る
白く光りて

さきいでし萩の葉末にしら露のこぼれんとし
て灯に光りゐる

曇り日の河原

多摩川の淺川清みたぎつ瀬の音をききつつ船
橋わたる

船橋の船腹たたくさざ波をかなしとみつつひ
とり渡るも

多摩川の秋雨さむみここだくもならびて下る
筏の船は

船まつと河原にたてば行軍の兵隊きたる秋雨
にぬれて

雪と七面鳥

はだら雪消えのこりたるふしん場をしづかに
あゆむ七面鳥は

あわ雪の消えのこりたる庭かげにひそやかに
立つ七面鳥のつがひ

朝なぎにふりける雪はおのづから檜ばらの上
につもりゆくみゆ

兄と弟

みとりすとかへりはきつれ故郷の背戸のみか
んの色づく頃を

弟のみとりするとてあさあさを米とぎにけり
露霜おくに

うすら寒き洋燈のほかげにかがなへて都にか
へる日の待ち遠き

新しき洋燈買ひゆき灯ともせば飽かずみてゐ
る兄のかほはも

新しきらんぷともせば近所の子等集りて來る
忙はしき土間に

夕さむき渚に立てば沖の海の小富士の島に波のよるみゆ、

柿の實のうれたるみつつふるさとの門べに立ちて今はうれしき

旅にいでて

旅にして思ひはまさる十一月の夕空やけて風のわたれば

蜜柑むきつつひとりを嘆き山道のかたむきそ
めし日かげふみしむ

宇和島の港にはてし船の上に木の葉ふき返す
山よりのかぜ

思ひくし旅にいづればわが心つげたきほどの
雨はふりつつ

旅すれば人のこひしくなりにけり空には赤き
夕やけのして

母の歌

遠ゆきし母が手植ゑの韮の花今はさかりとなりにけるかも

裏畑にかたまりて咲くしら花の韮の花かなし夕雨の中に

韮の花しろきを見れば幼などち髪にかざせし昔こほしき

海越えて歸りは來つれふるさとの生れし家に
母はいまさず

たらちねの母まさぬ家にかへりきて夕べ淋し
く洋燈をともす

新月

新月のほの明るきに面ふせて語りし人の忘ら
れなくに

梅雨空をりをり晴れて陽の光り夾竹桃の花に
うごけり

なくなへに蛙の小腹ふくらみてしばしば葉よ
りすべらむとする

秋風

大根のたねをまかなと思ひつつ彼岸もすぎて
秋ふけにけり

秋風ははやたちぬらし夕畑にもろこしの葉の
さやぐを聞けば

葛飾

蛙なくこゑを聞きつつ停車場の柵にもたれて
人まつわれは

葛飾の早苗水田の細道を君としあゆむ夕べやすけし

君まつと停車場にゆく小野のみち蛙田になく夕べなりけり

葛飾に住ひてひとをまつからに夕蛙小田になけばたぬしも

夕闇に人まちをれば垣のへのくちなしの花匂ひ來るかも

別れきてかへる夜道にしらじらと木犀の花ちりゐたりけり

あはむ日をおもひたへつつここに來しわが目にいたき野苺の花

さまよひてここには來つれ山梔の花ほのしろき生垣のあたり

來るひとを幾日待ちけむ門の外に今宵もひとり我が立ちつくす

先生の家にとなりてわが住めば夜學の子らの
本よむがきこゆ

東京の人きたれりと近所の子らさはぎ集るわ
が宿の庭に

朝はしもとく起きいでて脊戸川の水汲む人に
我も交りて

沼のべにむら生ひしげる女竹やぶよしきりの
聲そこより聞ゆ

蓮の葉を笠にしてあゆむ畔のみち燕はあまた
とびゐたるかも

蜻蛉つる子等に交りてけふもまた遠田にきつ
れ垂穂のさやぎ

秋の夕べ

野に立ちて何をもとめむこの心芒青原かぜの
わたれば

この心ひとにつげむと思へかも夕野にたちて
入りつ陽をみる

垂り枝はつゆしとどなり露おけば土にとどき
て咲きし萩かも

山はぎははやも咲きたり思ひくし我がゆくみ
ちの夕かげにして

いでゆ

はるばると旅に來しかも上つ毛の赤城山根を
目の前にみつ

みどり透く廣葉の中にかたまりて桐の實たれ
たりみな露もちて

いが栗のまだやわらかき青とげを掌にさやり
つつ行く峽の徑

夕されば木ぬれもしじにひぐらしのこゑすみ
わたる山のいでゆに
ゐろりべにまとゐてすする朝の茶のこころし
たしも山のいでゆに
いとしづかに列はあゆめりうちなびく都大路

山川の曲

葵　祭

いにしへの葵まつりをみんものと加茂の河原
に立ちて久しも

あゆみ來る牛車のきしり春の日にひびきてよ
ろし加茂の祭りは

けふはしも裝ひよろしく引く牛のあゆみはお

に埃もたたず

寂しさ

人まちてはかなき宵をさまよへばこひしき方
に灯のとぼりつつ

來るといふに終ひに來らずわがこころ空しく
なりて小床をしくも

さびしらに我が生くるものを秋の日の日向な
がらに小雨はふるも

このひるを陽はてりながら小雨ふり會ひたき
心しきりにわき來る

そし車のひびき

犬吠岬

曇りひくき燈臺下の岩の間に寄る波青し音の
高しも

見はるかす沖のはたてにをりをりをしぶき上
がれり岩あるらしも

友としてゆくこの濱はくれにけり砂ふみしめ
てただにあゆむも

外海の荒波よするしぶきかも岸べの草はみな
濡れてをり

銚子のや風たちくれば波を荒み磯曲かすめて
潮けむりたつ

唐津

つくしがた唐津の町に夜つきて山々にもゆる
野火をみにけり

燃えさかる山やく野火を見つつゐてつくし訛
りもきくにうれしき

近き山にもえゆく野火は窓にはえふたりした
しき夕餉ををすも

虹の松原

ふたりしてゆくに親しき松原や日かげうらら
に春の日はたけ

うつ波もしづかに來寄れ春の濱ふたり歩みて
こころ安けし

むきむきに海にそむける松低く白砂にとほく
春日かげろふ

伯父逝く

わが恩人なるなつかしき伯父、六月十七日赤十字病院に逝く、息の絶ゆるきはまでも言ふは唯政治と政友のことのみ

衰へし顔をまもりておのづから涙はわくも死にゆくひとに

く苦しむ伯父を

死にてゆくいまわの際も聲を斷たず言ひける
ことは國のまつりごと

消ぬるがに聲は細れど政治(まつりごと)國のことただにい
ひし伯父はも

死にてゆく人のいまはの言の葉を遺さんもの
と書くペンの音

言ひのこさん言はいまだもつきぬまに口動か
して死にし伯父はも

天城山

登り來て見下す天城の山なだり合歡の花あま

た陽にてりゐるも
ふりさけて我が見る伊豆の群山に霧立ちわた
る雨となるらし

木立ふかき天城の山にかかる雲をりをりふり
來霧雨となりて

山裾の谷の低きに風たちてみな靡きをり青田
の稲は

天城ねに風たちわたり並みたてる杉の群秀を
どよもしすぐる

道もせの秋草におく露しげし麓はいまだ夕べ
はやきに

夕まけて天城の山に生ふる杉のうれ動きやま
ず風立つらむか

空かぎる天城の山は木を深み今宵の月にくろ
ぐろと立つ

玉の緒の命のかぎり生きんとてか引く息なが

湯ヶ島

宵早く戸をさし眠る家多しこの街道の夜のし
づもり

瀬音たかき谷川にてる月夜なり光りくだけて
岩越す水は

湯ヶ島の吊橋渡り見上げたる山柿の實はいま
だ青しも

天城嶺に風たちくれば木立多みどよもす音の
ここまで聞ゆ

赤倉

空かぎる妙高山の山裾のなだりはながし北に
向ひて

山々のかさなり深し越後のや黒姫山は裾なが
く引き

關川は越後の國とみすずかる信濃の國を分け
ながれたり

山の上は秋風はやし青茅がや八月にしてみな
穂にいでたり

宵月夜かや原こめて照りあはしはるかにたつ
は米山の峰

秋の風けさを俄かに吹き來たり神奈山晴れて
けざやかに立つ

月の夜は山の低くどにかがやきて野尻の湖は
ひんがしに見ゆ

赤城山に登る

木洩れさす月のあかりにけぬの山いく重まが
りをこえて來にけり

はれし夜の月はてらせどわれらゆく谷ふかく
してひかりとどかず

疲れはてもだしてあゆむ谷のみち夜空に仰ぐ
星のかがやき

やうやくにつきたる宿は山の湯の土間の戸さして寝てゐたりけり（梨木温泉）

秋山は名しらぬ草の花さきて木々はいろづくあかるき眞日に

笹鳴りの音をききつつのぼりゆくもみぢ下照る赤城の山坂

秋がすみ和田なすをちに利根の川西日をうけて光りながれたり

茶の木畑の峠にたちて見はるかす山なみの上
に富士は晴れたり

大沼にこぐ櫓の音は白樺の森にひびきて夜は
ふけたる

黒檜嶺ゆ吹き下ろす風にかたよりて沼の上さ
むくなびきたつ霧

みちのへの通草とりつつおのづからこほしさ
まされり秋日てる山に

日を重ね別れゐるとも秋草のほそき命をまも
りてゆかむ

かなしさに涙ながして上るみち明るきかもよ
この秋山は

わがひとり見るに堪へめや赤城ねの毛欅の林
のあかるき紅葉

山の野にたてばおもひぞせまりくる宵草の葉
にみな露もちて

南の海

箱根山やまをたかみか麓べはいまだもふらぬ
雪つもりをり

磯の家に灯はともりたりみじか日の海のあか
りの殘るあはれさ

冬の波よる秀がしらのましろけれくれなづみ
つつ風のつのれば

雨ぐもの海よりはれて沖の島による波の秀の
陽にかがやける

魚干せる街かへりつつさみしけれ曇れる空は

はかげりたり

生くる命

秋の日のはれ渡りたる陽のひかり遠樹にふり
て人のこひしき

いよいよ重く
生きむことのうれしさにゐるもまことわれひ
との命のかなしきがため

いさかひしままにわかれていく日か寂しさに
をりくるしきものを

いでていにし君がうしろ手思ひつつ庭に下り
たてば宵月のかげ

ねぎ畑のうねま正しき畑にたちくれゆくそら
をみてゐたりけり

病むといへば逢はむ日遠しこの夕べわが庭の
への草ぬきにつつ

せつなさの身にせまり來ぬ山吹の花の垂り枝
に雨ふるみれば

こひいのる事のみ多し夕されば心やりかね灯にすわりたり

石垣に干し並べたる魚くづの匂ふ街なみに陽

月夜

ひんがしの空あかるみて二人ゐる小徑ほのかに月夜となれり

野に立ちて久しくなれり眼をあげて月の明る
む空をみにけり

ひとり居

高野山

悲しき思ひを抱き、寺に籠らむとて高野山に登る

ひとりのぼる山をたかだかと見あげつつ草履の紐を足にむすべり

何事も忘れてゆかむ頂きにつづきてしろき山
はらのみち

しげりふかき山つづきたる紀の國を目下にみ
つつのぼりゆくなり

山中の小學校は夏やすみ門をとざしてしづま
りにけり

徑をまわればたぎつ瀨川の音たかし木の間を
すきてみゆる朱の橋

空のいろくらくなりしがたちまちに山どよも
してふり來る夕立

雲ひくくふりくる雨の凄しさ谷の水音も聞え
ずなれり

溪に冷えし凉風とほる橋の上今は夕立もふり
やみにけり

ふと思ひさみしくなれり山水の岩越す音はた
ゆる間もなし

雨あとの山の氣ひゆる木下みち雫にぬれてのぼりゆくかも

仰ぎみる木ぬれは夕の陽あたれど谷の下みちくらくなりたり

高野山にのぼりつきたり雨はれてしづもる山に鐘なりひびく

つきいだす鐘なりこもる高野山槇の木立は年古りにけり

鐘がなる夕べの山頂にのぼりつき心おのづか
らあらたまりたり

寺の庭の筧をおつるま清水にひとりさみしく
足を洗へり

山の風ふきすぐるなへ夜の蟬羽ばたきなけり
庭のしげみに

僧院にこもり我がをれば小夜くだちあらしの
風はをりをりすぐる

小夜あらし夜ごとをふきて山ふかき高野の山
は秋たちにけり

山の上の町は戸ざして靜もれり屋根も木立も
明るき月かげ

嶽辨天に登る

見下ろせば紀の川面にわく雲は吉野の山の奥
につづけり

川の面に雲たちわたり向つ嶺の吉野の山は浮
き上り見ゆ

病む日

病ひえてこころ弱れり窓の外の欅の新芽日毎
にのびつつ

床の中に目覺めてさびし日のくれの街のもの
音賑かに聞ゆ

告げたき心押へていく日かも夕べとなれば熱
いでにけり

會ふ日まで生きがたき身と思ひつつ訪ひ來し
友にことづてをせり

よわるこころをひとり引きしめて汗ばめる肌
のあつきに眼をつぶる

みづからの力をたへて一すぢに生きんと思ふ
こころさぶしさ

さかりすみて
何がなし夫の香のこるなつかしさ縁の日向に
衣をときつつ

外つ國も秋さびつらむ我がひとりもみづる木
々の山々をみて

西空に陽はおちたればなみよろふ山際いよい
よ澄みきはまれり

ひとり居

夕づけばこころ忙しく戻りきてあかりのもと
にひとり坐れり

ひとりゐて心落ちゐずいでてくればゆききの
電車灯をともしたり

けふの日も夕べとなれり巷には明るき電車い
くつも走る

電車下り歸りを急ぐ人のかほわれはみてたつ
夕の巷に

ひとりたつ我にかかはりなし滿員の電車目の
前をつぎつぎ去るも

那

羅

家居

住まはむとひとり來れる奈良山にはやくも秋の風吹きてをり

み山べのふもとにひとり家居して夕べかなし
き灯をともすかも

み陵に間近く住みて夜半にきく松風の音はし
づかなりけり

み陵の松ふく風をききゐつつ心は深くひとを
思へり

ひとりゐのこころ堪へつつ戻り來し部屋に明
るき月かげさせり

木々の上にはるかに見ゆる塔の尖そがひの空は夕やけにけり

友の寺を訪ふ

大寺の庫裡の廣間に夜を更かし友と語れば月の出となれり

大寺をいづれば秋のよる更けて月は三笠の上
にのぼれり

夜の道を友としかへる春日野に月は明るくて
り渡るかも

春日野の細徑あゆむ我が裾に青かや草のしき
りにさやる

草原のくまなき明り身にたへてただあゆみを
り友のあとより

送られてかへる春日のしろきみちはるかにと
ほき人を思へり

ふり仰ぐ戒壇院のきざはしに月かげ更けて動
かざりけり

街の灯のつづく丘べに友と別れひとりさびし
く家にかへるも

静かなる街にさやけき月のかげ友の下駄音次
第にとほし

街をこえてま向ひに見ゆる生駒山月照り更け

てまたたくともしび

街に入れば心いよいよさぶしかり家の戸洩る

るともしびの影

或時に

おのづからこほしさわけり部屋の中にさし入

る月の明るきにゐて

逢ふべくはまことに遠し縁に出てすみゆく月
をひとり仰げり

身にしみて秋風とほるさびしさよ着物のえり
のよごれふきつつ

大極殿の跡にて

いにしへの宮居の跡に來て見れば草の穂ほけ
て風に靡けり

宮柱たてつらねたらん古へのいしずゑ今にのこる尊さ

秋の日はしみらに照れり原中にのこる石ずゑ空しかりけり

見返れば三笠の山にならびたつ大佛殿の屋根の大きさ

三笠山は小さくし見ゆ大佛殿黄金(わうごん)の鴟尾は陽にかがやきて

三笠山にのぼる

見下ろせば里わくらみて夕かしぐ煙いくすぢ
もたちのぼるなり

山の上はいまだ明るし田の中を走る電車は灯
をともしたり

見下ろせば塔も木立も低くして大佛殿建てり
屋根のひろさよ

唐招提寺

門にたてばあたりしづけし遠くにて蜻蛉つる
子のこゑきこえくる

圓柱は位置を保ちて並びたり唐招提寺の屋根
の重たさ

境内のもの靜かさよ歩み入る足音たかくこだ
ましにけり

大きなる扉ひらけばしめやかに土の匂ひのた
だよひ來るも

講堂の扉を洩るる弱き陽にむきむきにならぶ
み佛のかほ

小暗きにみ佛のかほを見守れば古きいのちは
しづかなりけり

堂をいづれば廣庭にたかき赤松の梢あかるく
夕日あたれり

法隆寺

驛をいづれば田中のみちは一筋に斑鳩寺の塔にむかへり

塔にむかひひとりし行けば晝ながら法隆寺村はしづかなるかも

當麻寺へ

畔みちにたてばはるかに當麻の塔二上山のやまもとに見ゆ

葉をおとしあらはになりたる木々の上に當麻の塔は二つならべり

夕づきて寒くしなれるかへり路の田川の水は澄みとほりたり

二月堂夜詣り

夜詣りの人に交りてわれもゆく夕やみ深き春
日のみちを

石段の下より仰ぐ二月堂屋根まで明るし燈火(とも)
のかず

佛燈(ぶつとう)のあかりとどきて見ゆる限りみ堂も廻廊
も夜詣りの人

杉むらに灯かげ明るくけむらへり東大寺の鐘
なりこもりつつ

初夜の鐘の鳴りひびくなかを二月堂に夜詣り
の人らつづきてのぼる

浄瑠璃寺

丘越しに何時までも見ゆる大佛殿ふりかへり
つつ峡を下れり

ここははや山城ならむ山かひに青田ひらけて
涼風とほれり

徑の上におとす陽かげの照りかげりせはしく
なれり風もさやげる

夕立すぎてすがしき風の通るみち木ぬれの雫
しきりにおつる

雨あとの空ふかく晴れて山もとの堂塔のやね
に雫ひかれり

庭にたてば池向ふなる三重の塔古さびながら
しづくしたたれり

塔と堂池をはさみてしづかなり夕立はれしこ
の山かひに

つぎねふ山城のくにの山峽に千年を經たる塔
のしづけさ

九つの坐像のみ佛ゐならびて天井にとどく頭
の大きさよ

一列にみ堂にならぶ九つのみ佛の坐像おもお
もしかも

多武峰

谷川の低きに水の音こもり空のくもりはいよ
いよ重し

多武の峰にのぼりつきたり山の上はもみぢ明
るく秋ふかみたり

岡寺より橘寺へ

はざま田の棚田の稲は黄に光り麓にとほくひ
らけたるかも

雨雲はひくく下りたりはざま路の柵田の稲の
そよぎしるけき

岡寺の門への道のきざはしにふる雨の音をき
きてたちたり

うす暗きみ堂の中の大佛我が目とどかずしば
し仰げり

目になれてややに見えたりみ佛の坐像のみ胸
ゆたかなるかも

橋寺の一筋道に音たてて雨ははげしくふりま
さりたり

田をうちてふりつのり來し雨の音黄ばめる稻
は土にふしたり

かたみにもだして歩む日くれ方畝傍の山を目
近くにして

かなしさをひとり耐へてふる雨に傘傾けてひ
たに歩むも

新薬師寺

尼寺のつつましき寺のたたずまひ山のふもとに千年をへたる

山裾の松にこもれる風の音み寺の庭にたちてききをり

しづまれるみ堂の中の薬師如來眼ひらきてただしくおはす

尼寺のみ堂をいでて近々と高圓山を仰ぎ見に
けり

古寺にたつきいとなむつつましさ尼はさ庭に
張りものをせり

馬酔木

茂り枝にちりたまりたる馬酔木の葉夕風ふく
に落つる音すも

落葉ふる音をききつつ歩み入る竹柏の林はくれて來にけり

木の間ふかくさし入る夕陽あはあはし近づき來たる鹿の足音

法華寺にゆく

川に添ふ徑のながてに見はるかす山の高根は雪ふりにけり

夕ちかくひとり來しかば尼寺の屋根うつ時雨
の音をききをり

川岸をひとり靜かに歩みけりみ陵にふく風の
音ききつつ

尼寺にてりかげる陽をみつつあれば時雨ふり
きて屋根をぬらせり

草の實集

日向和田

山下に家居したたしむ村人等み寺の庭ににほふ

さくら花

むぎ踏みの人はかへりて畫畑にふまれし麥は
右に左に

青むぎと白壁ばかりみゆこの村は春たけなは
に靜かなるかも

川向ふにならぶ家居のうしろ山竹のそよぎは
明るかりけり

山もとの竹のそよぎの明るさを川向ふにして
見つつあゆめり

五番町

雨あとのゆたかにたたふる濠の水草刈り人は
舟にてわたる

夏草の土堤ながながと濠水にかげうつしゐる
梅雨空のもと

ほりみづのひとところあはく日光さし土堤の
夏草に雨ぞふりゐる

梅雨空

松三本うゑしが一本枯れて育たず朝に夕にみるにすべなし

秋されば武藏ひろ野の夕風に梢鳴らして生いけむものを

梅雨空の時ま晴れわたりかれがれの松に陽ざしの强くあたるも

枯れてゆく松の細枝に脂わきて陽にてるみればかかさぶしき

夏

いささかの務めするとて我もゆく晴れたる空
の朝すがしき

仕事もちて朝ゆく街のすがしさやことしの夏
をわれすこやかに

人なみに我も仕事をもてり朝戸出の夫をおく
りて心つつまし

仕事畢へて思ふことなきうらやすさ涼風とほる部屋に坐りて

日曜をひと日留守もるわびしさよ土にひゞきて午砲の音きこゆ

或日

人の心うたがひそめて眞夏日のあつきしづもり堪へてわがをり

眞心はかよひ難きぞあきらめて友を送りて門
にいでたつ

ひとごとはたのみかねつも夕つ日の友のうし
ろに照れるさみしさ

目黒にて

夜ふけて友としあゆむ競馬場の向ふにあがる
花火のあかり

かへり來る道のながての暗の夜花火たまゆら
明るむかふに

土佐の海

屏風岩たて連ねたる土佐の海のうみぎしにあ
がるしぶきの高さ

屏風岩の上より見れば岩燕飛び交ふはやしし
ぶきにぬれつつ

打ちよする波のしぶきは陽に光り外海につづ
く海の青さよ

青々と崖下によする海のいろ凄まじくしてつ
ばめ飛び交ふ

土佐の海のそとうみはあらしうち寄する潮は
群立つ大岩をこせり

ここに立てば白浪たかし目路とほく太平洋に
つづく海づらさやかなるしさを詩人は
外濱の風まともなり斜面の草ぜたけみじかく
花さきてをり

島の町

島の峰にはづかにのこる入陽のいろ漁りの船
はみな戻り來る

賑はしき一時すぎてもやふ船にしづかに寄せ
てかへす浪の音

島の町の夜はしづかに更けゆきて魚の匂ひの
こもりふかしも

この島の家居はしたし百萬長者の屋根の上に
も石ならべたり

町中はしづまり返り聞きをれば寄する波音鳥
をつつめり

さかり來てふり返りみれば島のかげ小さくなりて海にしづめり（かへり二首）

沖風に帆をあげてゆく凪ぎ日和漁りの船にいくつもあへり

秋の路

陽の入りのもののしづけさ峽間路に見あぐる山はいまだ明るし

上の田より下田に落す水の音草にこもりて山
の靜けさ

櫨の實のかそかにふるる音きこゆ埃をさけて
みちべに立てば（馬車をさけて）

小庭

一本のかやの木うゑてたかだかと見上ぐる空
はよく晴れにけり

遅まきのトマトはあまた實をつけて青きがま
まに秋ふけにけり

窓のへの今年うゑたる山椿小さき實ひとつつ
けにけるかも

雨晴れて秋ふかまれり庭はぎの花さきながら
下葉かれつつ

庭すみの白萩の花日毎ちりこのごろさむくな
りにけるかも

町中の草のともしささ庭べに移り來てなく馬追の聲

ひとりねてしづかに聞けば窓のへの山椿の葉におつる雨の音

朝顔

垣根の朝顔の花目にたちて小さくなれり咲き上りつつ

雨あとのすがれ目につく朝顔の土に近きは實となりにけり

よべ吹きし野分の風に朝顔のけさ咲く花は小さくなれり

晩秋

朝庭に夫も下りたち草花の種をとるなりけふのやすみ日に

めづらしく夫と籠りてしづかなり秋の陽ざし
の庭に明るき

箱根游行

トンネルを出でて見下ろす目の下の谷川とみ
に低まりにけり

山の上に青菜を買ひてもどり來るみちべの木々はみなもみぢせり

山の上にはるばる來つつ湧く水の清水に夕餉の米を洗へり

ま清水に米とぎすまし見上ぐればもみぢ明るき夕山となれり

湧きいづる山の清水を鍋にくみ味噌汁つくる夕べつめたき

湯にひたり耳をすませば電車の音山にひびき
て遠くにきこゆ

みち向ふのいでゆの中に我をよぶ友らのこゑ
はこだましにけり

外にいづれば月夜あかるき木下かげ湯の香し
たしく匂ひて來るも

大湧谷にゆくとて

坂の上にふり返り見れば低くなりし山はら明
るくみなもみぢせり

動きゆく雲のきれまに向つ根のもみづる木々
はけざやかなるも

ふる雨ははげしくなれり今はただ山の茶店に
茶をすすりをり

巻末に

私が歌を本當に勉強し初めたのは、まだほんの最近、「草の實」創刊の前後からであつた。其の以前大正六年から「草の實」創刊頃までは、嚴密な態度からいへば、見榮や、誇張や虚飾もあつたし、お砂糖のやうな甘さもあつて、今思ひ出すと心ひそかに赤面する。

とにかくどんな態度であつたにせよ、大正六年から同十年までは ずつと歌を作つてゐた。十年の三月頃から私の心の轉換から、思想の急變が來て全く歌が出來なくなり、とう〳〵十三年の秋までは、

丸で見返りもしないで過ぎて來た。

それが震災の年の九月を中心にして、七ケ月餘りの奈良滯在と、其の間に約一ケ月登つてゐた高野山の靜寂とによつて、私は今迄の作歌態度から別の眞劍な、そして虔ましい歌の生活に歸つてゆくことが出來た。それは其の頃の私の周圍の方々の賜であるとさへ思つてゐる。高野山に登つてゐた間泊めて頂いた親王院の生活は、殊に私の心を和やかに導いてくれた。それには水原堯榮氏があつた。氏は高野山きつての人格者といはれてゐる程の方である。心の憂みを持つて登つてゐる私は、奥の院のさえた月に泣き、更けた僧院のやる方ない寂しさにいつも捉はれた。そんな時何も言はず默つて、山

では珍らしい紅茶やお菓子を小僧に持たせてよこされたことも再三ではなかつた。私はあの間の短い生活を考へるとき、何時もみ佛に仕へる人の尊さを思ひだす。

それから山を下りてから間もなく震災で、其の年の暮れまで奈良に止まつた。奈良にゐる間に、私に芽ばえてゐた佛敎美術へのあこがれを助長して下された方に東大寺の筒井英俊氏がある。私の淺いこれらの智識は、皆同氏の賜であるといつてもよい。何を見てもせつなく悲しくなる其の頃に、筒井氏はお忙しい閑をさかれては私の見知らぬみ佛や、古い建築を見せるために、遠い所までも連れてゆかれた。私は一生懸命に勉强した。藥師寺の橋本管長に紹介して下す

つたのも其の頃である。私は一切を忘れて夢中になつて、そして奈良に永住しやうかとさへ思つた。

斯うした幸福な周圍の賜で、私は期せずして又歌の生活に歸つて來ることができたのであつた。

斯んな譯で、自分の氣持ちからいへば、「草の實」以前の歌と、其の後の歌とを區別するために、こん度の歌集は「草の實」以前のものばかりにしたかつたのであつたが、故古泉千樫先生をはじめ同人の方も、一緒にした方がよいといはれたので、全部集めることにした。集めて見ると案外歌の數が多く九百首近くになつて了つて、私の豫定の數三百五十首にするのは大ていでなくなつた。どの歌もみ

んな團栗の脊くらべでうんざりして了つた。それと歌は下手であつても其の歌を作つた時の氣持ちを思ひだして、どうしても捨てることができないのもあつて、豫定數にするには中々容易でなかつたが、兎に角五百首位にして古泉先生の所にお預けした。先生が其の上、選して下さる筈であつたから。所が間もなく先生は御病氣がひどくなられ、二三頁みて頂いたばかりで、遂に亡くなられた。そんな譯で出版が春になり秋となりとうとう今になつて了つた。

初めの「早春譜」と「山川曲」とは「草の實」以前の歌で、「那羅」からが「草の實」所載のものである。又「那羅」は作歌順序からいへば、中に高野山をはさむのが本當であるけれども、奈良に住つて

ゐた靜かな氣持ちを、いつまでも見つめてゐたい心と、二つに別けて却つて繁雜になることをさけるために、便宜上一緒に纒めることにした。其の他は皆作歌の順序を追ふて年代順にした。

今ここで自分の歌を振りかへつてみると、たゞ恥しい思ひが殘るばかりである、これからこそほんとの歌への第一歩のやうな思ひがする。大方の諸先輩の御教示を願つて、倦まず撓まずしづかに歩いてゆきたいと思つてゐる。

「月光」といふ名前は、美の權化のやうな、しかも靜寂極りのない、三月堂の側侍、「月光菩薩」のことである。私は高野山や奈良に

於て私の心を培はれ、はぐくまれた永久の紀念に、それにふさはしい名を考へた。そして奈良にある佛像中、三月堂の中の一番好きなみ佛の名を拜借したわけである。又月の光りに考へても、私の心は滿足してゐる。月夜の光りにはいろ〳〵のなつかしい思ひ出があるから。

裝幀の繪は新羅國筬篁寺の瓦の模樣で天平時代のものである。文字は天平の寫本の中から、この秋奈良にいつたとき筒井氏がわざわざ選びだされたものである。瓦の模樣は、初め拓本にとつて頂いた時は、線が非常に美しく、もつと複雜に力强かつたのであつたが、

木版にしたり、金を掃いたりしたので、大分感じが違つて來た。實物は實に〳〵美しい。折角たんねんに拓本して頂いた筒井氏には申譯ないことである。

最後に、「月光」の口繪全部を寄贈下された筒井氏、荏苒日をのばしてゐた私をして、早く出させるやうにして下された赤井氏、面倒な歌稿の整理を初めから引き受けられた土井氏、林氏、其の他印刷の事では宮坂氏、西村醉香氏や、延いて私の我儘を心よく入れて下された飯尾氏に、深い〳〵感謝の意をさゝげて筆を擱く。

昭和二年十二月十二日

不許複製

昭和三年一月四日印刷
昭和三年一月十日發行
【定價金一圓五十錢】

著作者　北見志保子
發行者　飯尾謙藏　東京市神田區南神保町十六番地
發行所　東京市神田區南神保町十六番地　交蘭社　振替口座東京四〇二七九番
印刷者　笠原知勝　東京市牛込區袋町一番地

終